

男女共同参画学協会連絡会第三回シンポジウムに寄せて

第3期幹事学会：日本化学会 会長 村井眞二

活動の推進に勢いと大きな流れができつつある - このことが実感される2005年といえましょう。このような時期に、男女共同参画学協会連絡会第三回シンポジウムの主催者としてご挨拶申し上げますことは光栄であり、また大きな責任を感じるところであります。

男女共同参画学協会連絡会は、自然科学系の多くの学協会が、応用物理学会、日本物理学会ならびに日本化学会の呼びかけに賛同して集結し、平成14年10月7日に発足したものです。このような専門領域を超えての連携は我が国で初めてであるばかりではなく、国際的にも注目されています。以後、毎年10月7日にシンポジウムが開催されています。第1回目は「1周年記念シンポジウム」(15年 於化学会館)、第2回目は、「設立2周年記念シンポジウム」(16年 於東京大学駒場)に見られるように「設立」の勢いを反映した会名でしたが、本年は単に「第三回シンポジウム」とされたのも、当活動が確実に軌道にのったことを裏づけるものでしょう。

シンポジウムテーマは第1回「男女が共に生きる社会へ」、第2回「多様化する科学技術研究者の理想像：学協会アンケートが示すもの」でありました。本年のテーマは「21世紀の産業を拓く男女共同参画社会」です。これまでのテーマが主に大学、研究所の研究者に焦点を当ててきたのに対し、今回は産業界における技術者、研究者、また科学の仕事を目指す学生にも視野を広げて男女共同参画を考えようというものであります。

当学協会連絡協議会の活動が広がりを見せています。平成15年度文部科学省委託事業として「21世紀の多様化する科学技術研究者の理想像 男女共同参画推進のために」の報告書を平成16年3月に発表しています。一方、日本学術会議では、理系学会や男女共同参画学協会連絡会のこれまでの活動をベースに応用物理学研究連絡会、工学共通基盤研究連絡会における専門委員会の合同委員会で議論が重ねられてきました。これを基に、日本学術会議主催公開講演会「どこまで進んだ男女共同参画」が平成16年11月24日に開催されました(日本学術会議)。この公開講座の内容は雑誌「学術の動向」2005年4月号に詳しくまとめられています。文部

科学省は 18 年度予算概算要求を本年 8 月 31 日に出しました(科学新聞、2005 年 9 月 9 日)。その中に、女性研究者の活躍推進のため、出産・育児等による研究中断からの復帰支援のため 2 億 2 千 800 万円を、科学技術分野で活躍する女性研究者のロールモデルを示したり、シンポジウムを開催するため 4 千 700 万円を新規要求しています。

今回の主催者である日本化学会から 2 点述べさせていただきます。男女共同参画学協会連絡会の動きに呼応して日本化学会内に男女共同参画推進委員会(相馬芳枝委員長)が平成 14 年 9 月に発足し、理事会や委員会の役員に女性の登用を増やす事などを含むいくつかの要望を提出しました(化学と工業、2004 年、1 月号、P55)。この要望がベースとなり、平成 16 年 9 月の理事会で新たに女性理事枠 1 を設ける事が決定され、早速上記推進委員会から会長に推薦された女性理事候補 3 人を通常の代議員会の選挙に供し、平成 17 年 2 月に女性理事枠としての理事が任命されました。(西川恵子 千葉大教授)。先進的な取り組みであるとの自負があります。一方、国際的に見れば、女性理事枠を確保せねばならぬという必要性自体が後進性を示していることを TIME 誌の本件に対する指摘(TIME 2005 年 3 月 28 日号 pp.58)を待つまでもなく認識しておくべきことでもあります。次の報告です。物理学の世界組織として IUPAP があります。これに相応する化学の世界組織として IUPAC(国際純正応用化学連合)があり、世界 65 ヶ国の化学者による国際機関として活動しています。本年 8 月に北京で行われた同連合の総会で、同連合 85 年の歴史上初めての女性会長として我が国の松本和子早稲田大学教授が選出されました。2008 年に就任予定であります。

本シンポジウムは日本化学会と日本原子力学会がお世話させていただいております。最後になりましたが、今回のシンポジウムをご支援いただいておりますご来賓の皆様方、会場をご提供頂きましたお茶の水女子大学様、また、特別講演とパネル討論会の講師をお引き受け頂きました先生方に改めて感謝申し上げます。男性・女性が共に力を発揮できるような社会状況を作り出すために、力を合わせて活動をつづけたいものと念じております。